竹千代賞

発　熱

相川実優

朝九時ごろ目が覚めた。目覚める時間にしては遅いのではないかなんてこと、いちいちツッコんでいたら話は進まない。特に意味はないが、布団から起き上がり洗面所に向かうのがいつもの私のルーティーン。だが、今日はのんきに洗面所で寝癖を眺めるような余裕はなさそうだ。

「やばいかもしれん。」

そう呟いた私を母が不思議そうに見ている。ズキズキと脈打つように痛む頭痛をこらえているため、変顔かというほど顔をしかめながら体温計を取りに行く私を見て、母は何かを察したようだった。

―ぴぽぴぽぴぽ　ぴぽぴぽぴぽ―

体温計の音って、なんかまぬけな感じがして面白いなとか考えて嫌な予感から神経をそらそうとするが、そんなことで人間の体温は変えられるものではない。

体温計には三九・一という数字が表示されている。

ここから私の発熱生活は始まってしまった。

熱を出したらまずコロナを疑われる時代。私は布団と布団の周りに居たぬいぐるみたちと共に自室に放り込まれてしまった。部屋にあったが使っていなかったベッドに寝転ぶと、ケースに入ったアルトサックスが二つ、静かに置いてあるのが見える。一つは小学生の時に使っていたもので、もう一つは今部活で使っているもの。三度の飯と部活が好きな私は、そのサックスに、ｗｅｂで「日本人によくいる名字」と検索したら、一番上に出てきそうな「田中」という名前を付けたり、サックスの神だとか訳の分からない設定をしたりして大切にしている。

普通熱を出したら学校を休まなければならない。そうなると、もちろん部活も休むことになる。しかし今は夏休み中。そしてお盆中なのである。学校もなければ部活もない。私の部活愛が発熱と部活の日を被せないようにさせることができるとは想像以上であった。お盆明けには私の学校で行われる夏祭りがあり、そこで私たち一年生は初めて人前で演奏するため、休みのうちもその練習をしようと思っていたのだが、これだけの熱があればしばらくは楽器も吹けないだろう。一年生に私のように小学生の時から吹奏楽で使われる楽器を習っていた人はいない。唯一の経験者として、曲が一通り吹けるようになっても楽譜をしっかり読み込み、上手に吹けるようにならないと…と思っていたところでの発熱だ。そんなに焦るでないという神…いや、田中からのお告げなのだろうか。

―がちゃん―

「おかゆ作ったから少しでも食べられたら薬飲んで。寝てれば熱下がってくると思うよ。」

母が作ってくれたおかゆからはいい匂いがする。嗅覚があることを確認して、一口食べるとしっかり味もした。食べることが人生の半分の楽しみといってもいいほどの私は、コロナの症状で味覚や嗅覚が失われるということを恐れていたのだった。今は大丈夫だとしても後からきたらいやだなと思いつつ、おかゆを全て食べきり、薬を飲んで寝た。

次に目が覚めるともう正午を過ぎていた。

―がちゃっっ―

「コロナの検査してみるか。」

父が、買ってきたのか元々家にあったのかわからない市販の検査キットを持ってきてくれたようだった。私がきらいなものトップ三には入る鼻に綿棒を入れるタイプのものではなく、プラスチックの棒についたスポンジのような部分をくわえているだけでよく、比較的楽だった。

「一五分経ったかな」

そういった父が結果を見せてきた。しかし二人そろって納得がいかない。念のためもう一種類の検査キットで検査をしてみたが、結果は変わらない。

「コロナじゃない！」

次の日、病院に行くと、結局もう一度検査をすることになり、見事鼻に綿棒を突っ込まれてしまった。

「結果が出ました。コロナ陽性ですね」

いやコロナやないかい。昨日の検査は何だったんだと思いつつ、家に帰って病院で処方してもらった薬を飲んで寝た。

その日の夜はあまり眠れなかった。「月」を見ていたからだ。ベッドで寝転がりながらその月を眺める。青白い光が部屋を少し照らしてくれた。だがその瞬間、私の脳内に衝撃が走った。月が点滅したのである。私の知っている月は点滅しないがこの月は点滅するのだろうか。いや月はこの世に一つしかないはずだしおそらく点滅しない。しかしそれだけでは終わらなかった。月が瞬間移動したのである。もうわけがわからない。その光の元をよく見てみると、「風量」の文字が見えた。その光は「月」ではなくエアコンの光だったようだ。

体温は四一・二度。高熱によりエアコンの光が月に見えるようになってしまったのであった。

たとえ高熱があったとしても食欲だけは失わない私は、一日三食残さず食べたおかげで、三日ほどで熱が下がっていった。そして六日もたつと倦怠感もなくなり、完全回復に限りなく近づいていた。

「そろそろサックス吹いていいはず。」
茶色い革でできたケースを開けると、きらきらと輝く田中が姿を現した。持ってみると、金属の冷たさが伝わってくる。固すぎず緩すぎずマウスピースをくわえて少し力を入れる。息を入れると、鋭くて優しいアルトサックスの音が、私の体を突き抜けるように耳の奥で響いた。そして譜面台の上に楽譜を開く。夏祭り楽しみだなとか考えながら、もう一度楽器を構えると、ちょっと前とはまた少し違う「熱」が、私の中に灯り始めたような気がした。